

令和元年度介護ロボット等導入実証ワーキンググループ会議  
会 議 録

1 開催日時

令和元年8月5日（月） 10：30～12：00

2 開催場所

クラウンパレス小倉 2階 香梅

3 出席者（五十音順）

泉構成員、伊藤構成員、近藤構成員、柴田構成員、曾我構成員、田代構成員、橋元構成員、蜂須賀構成員、藤野構成員（欠席：山本構成員）

4 オブザーバー

【実証施設】

（社福）孝徳会 サポートセンター門司・中村施設長

（社福）広寿会 足原のぞみ苑・片桐施設長

（社福）春秋会 好日苑 大里の郷・渡辺施設長

【厚生労働省】

老健局介護ロボット開発・普及推進室 井上室長補佐

5 会議経過

【議題1】平成30年度の取り組み結果について 資料1

《意見等》

構成員：体幹傾斜角の計測・比較はよく用いられる手法なのか。

構成員：筋電図に比べると安価で測定できるため、腰痛リスクを検討する際は簡易な計測手段として用いることがある。

構成員：利用者の状態によって測定結果が変わると思うが、似たような状態の利用者で比較したのか。

構成員：利用者については、基本的には全介助で使用機器が有効に作用する方を対象としている。また、機器の操作も対象の利用者を普段介助している職員に行ってもらった。

構成員：介護保険の要支援・介護度は介護に係る手間（時間）で決まっている。しかし、ロボットを使用したときの介護にかかる時間の変化、という視点が介護保険の評価基準にはない。これを今後どう取り扱っていくのかに興味がある。

構成員：機械だけで物事を全部解決しようとするのではなく、上手な使い方が一番大切なのではないか。

【議題2】令和元年度の取り組みについて 資料2

《意見等》

構成員：QOLの評価は非常に難しいが必要なものだと思う。どのように考えているか。

事務局：今までもQOL評価の必要性は感じていたが、指標と実施可能なものが見つからなかった。しかし今回のQOL評価は京都大学の協力を得ることができ、利用者の身体の状態と活動状況・職員から見た状態・利用者本人の気分等の項目がある帳票を活用し、評価を行おうと考えている。

構成員：QOLの評価に取り組むことはありだと思うが、すでに市が行っているようなICFステージングを用いて評価する方が実施しやすかったり、有効なデータが出てくる可能性もあると思うが、厚労省としてはどう考えているか。

井上室長補佐：パイロット事業の成果をどう全国に広げていくかが今後の国の宿題だと認識している。厚労省の中に今日頂いた意見を持ち帰って、参考にさせてもらいたい。

事務局：市は昨年ICFステージングを用いた評価を行った。今年度はQOLによる評価を行うが、どちらの指標の方が現場で使いやすいか、もしくは有効か、昨年度の結果を踏まえながら考えていきたい。

構成員：元気高齢者活用の取り組みがあるが、元気高齢者が常に元気とは限らない。元気高齢者に身体が痛いときの良い筋肉の使い方などの知識を広めて欲しい。また、今回の実証の成果をその他の施設にどう普及するのかについて、早い段階で取り組んでもらいたいと思う。この事業に希望を持っている。